

チーム医療

うちのメンバー
自慢①

国内2例目の多剤耐性菌を 勉強熱心な検査技師が発見

チーム医療で成果をあげる施設の医師に、感謝したい・自慢したいコメディカルを紹介いただきます。



同院ICTには塩谷氏、布施川氏に加え、感染管理認定看護師の清水昇一氏(右)、薬剤師らもメンバー。写真左の石田岳史氏(内科診療部長)はIPWの担当。「各コメディカルの『プロ魂』に、いかに医師が火を付けるかが重要」と話す。

いつも
ありがとう



さいたま市民医療センター
副院長 外科部長
塩谷 猛
1988年日本医科大学卒。同大学第二外科入局、埼玉県立がんセンター、日本医科大学蔵小杉病院等を経て2011年から現職。



臨床検査技師

さいたま市民医療センター
臨床検査科

布施川 岳人

1994年東洋公衆衛生学院卒。大宮医師会市民病院中央検査科を経て2009年より現職。微生物学二級臨床検査士。

さいたま市民医療センターでは、2010年、ほとんどの抗生物質が効かない多剤耐性遺伝子「NDM1」をもつ肺炎桿菌(かんきん)を検出した。国内検出は2例目。早期に発見できたため他の患者への感染拡大はなかった。この時の立役者となったのが、同院臨床検査技師の布施川岳人氏である。

「その半年ほど前に海外の論文を読んだ、この菌の存在は知っていました。ある検体をスクリーニング検査して、普通の菌ではないと確信しました。肺炎桿菌にはペニシリンが効かないことはよく知られていますが、他の抗生物質にも非常に強い耐性を示しており、もしやと思ったのです(布施川氏)。

布施川氏は、自らもメンバーである感染対策チーム(ICT)の塩谷猛氏(外科・副院長)に報告すると同時に、自らの人脈で即座に国立感染症研究所に遺伝子検査を依頼。NDM1と確定診断を得た。塩谷氏はこう語る。

「我々医師は医療の専門家ですが、菌や感染症の、それも最新情報については臨床検査技師の方が詳しい。『餅は餅屋』です。それぞれの専門職と対等なパートナーとして活動することが、最

善の医療の実現につながります。今回もいい例でしょう。これからも、感染症については教えてもらおうスタンスで、臨んでいきたいと考えています」

一方の布施川氏は「普段から医師も看護師も自分たちの話をよく聞いてくれるので、気づいたことは躊躇なく伝えていきます。それが良かった」と話す。

同院のチーム医療が円滑に推進されていることは、埼玉県立大学が2012年に実施した専門職連携実践(IPW)調査にも表れている。近隣6病院を対象に、全職員が上司を介さず回答を提出する方式のアンケートで、同院は回収率トップに加え、「他の専門職を対等な仲間として尊重するか」に「してい

る」と回答した割合は74%(平均62%)、「他の専門職をねぎらう」も53%(平均43%)と、高い値を示した。これも施設の風土を表す一端だろう。

布施川氏は照れくさそうに「自分たちは当たり前のことをやっているだけです。でも、病院の医療に貢献している実感は、正直うれしい。これからの検査技師の持っている『引き出し』をどんどん開いてほしいと思います」と語る。塩谷氏は「コメディカルがやりがいを持って働ける環境は、医療の質向上に加え職員の離職防止にもつながり、結果的に医師も働きやすくなります」と言う。スムーズなチーム医療で得られるメリットは限りなく大きい。

臨床検査技師 DATA

●業務内容

医師又は歯科医師の指示の下に、微生物学的検査、血清学的検査、血液学的検査、病理学的検査、医動物学的検査、生化学的検査、生理学的検査(厚生労働省令で定めるもの)を行なう

●さいたま市民医療センターの臨床検査科の人員と体制

21名。細菌検査室2名、病理・細胞検査室6名、生理機能検査室7名(常勤6名非常勤1名)、検体検査室6名(常勤5名非常勤1名)
※21名全て臨床検査技師
※検体検査室の6名は委託業者

●資格取得者数(全国)

累計で179,598名(平成23年度)

●教育コース・プログラムなど

大学・短大・専門学校の養成課程を修め国家試験の受験資格を得る。

●試験の難易度(合格率)

臨床検査技師国家試験(平成24年度77.2%)

●多くが加入している学会など

- ・日本医学検査会
- ・日本臨床微生物学会
- ・日本感染症学会
- ・日本化学療法学会